

<資料>

日帰り巡検をとりいれた市民講座の試み

— 流通科学大学における事例から —

An Experiment of Extension Lecture Linked with One-Day Excursion
— A Case Study in University of Marketing and Distribution Sciences —

白石 太良*

Taro Shiraishi

流通科学大学の巡検型市民講座は各2日間の日程で年4回実施し、その特徴は事前の講義と現地での見学・解説との組み合わせにある。それは、地域の歴史・文化に焦点を当てる兵庫学としての講座に日帰り小旅行を加えた形態であって、埋もれた地域資源を周知できるため観光振興による地域活性化にも寄与できる。講義と見学の連携の仕方やバス利用の問題点などの課題もあるが、巡検を取り入れる市民講座は大学の行う社会貢献として有効な方法の一つである。

キーワード：市民講座、日帰り巡検、事前研修、生涯学習、地域活性化

I. はじめに

本稿の目的は、流通科学大学オープンカレッジの一環として取り組んでいる巡検型市民講座の実践記録をもとに、歴史学と地理学、それに観光学とを結びつけて行う生涯教育の一つのあり方とその課題を考えるとところにある。

近年は、公開講座や教養講座、オープンカレッジなどと称する市民講座が多くの大学で行われ、専門的内容を平易に解説する講義とか、一般市民の教養の向上をめざした講義などが実施されている。それらは、生涯教育が叫ばれるなかで大学の社会貢献がねらいとされ、大学経営の一環に組み入れられている場合も多い。このような位置づけにある市民講座はどのような方法で行われるか。その形態には講義型、ディスカッション型、実習・演習型、体験型、見学型などがあげられようが、芸術やスポーツ関連等の講座の一部を除いて教室内での講義型や実習型が主になることが多い。

しかし、大学の市民講座で大きな比重を占める歴史・文化の分野では、講義の流れの一部に史跡や博物館などの見学が組み込まれることも少なくない。これを広く取り入れて、見学に重点を

*流通科学大学 名誉教授、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

おく講座、少なくとも教室内の講義と屋外の見学を対等に結合させる講座が考えられないか。ここに、講義と巡検（エクスカージョン）を組み合わせた講座の形態が浮かび上がってくる。

巡検は地理学の伝統的な研究・教育の方法であり、地域を総合的に把握する目的で行われる。それが重要なのは、現地に身をおいて観察し、目と耳と膚を通して地域を知ることができるところにある。したがって、足元の暮らしの舞台を見つめるねらいの講座では、講義に加えて受講者の観察や体験を含む巡検が効果的ではないかと考えられる。さらにこの方法は、その地の自然・歴史・文化・産業などを知るだけでなく、知られざる地を訪れるという好奇心、言い換えれば受講者の観光への魅力を満たすといった面も有している。巡検という方法がどの市民講座でも可能というわけではないが、その特徴と問題点を検討しておくことは必要であろう。

II. 巡検型講座の内容

1. 講座発足の経緯とねらい

流通科学大学のオープンカレッジは、大学の特性を生かした流通・経営・情報の分野、あるいは歴史・文化といった教養的内容など、従来の公開講座を踏襲して始められた。2000年代に入ってから語学系やスポーツ系の講座も加わり、歴史に関しては講座の一環として寺院・遺跡等の見学が行われるようになった。

この流れのなかで、野外見学に重点をおいた講座を企画したのは2007年秋期からである。寺院等の見学が比較的多くの参加者を得ていたこともあり、現地に出かけて解説するという巡検形式の講座には受講希望があるだろうとの判断であった。そこで、『兵庫探訪』のタイトルのもとで「知られざる播磨を探る」「神戸下町探訪」「姫路探訪」の三つの企画を立案、いずれも定員30名、10名以上であれば実施するとした。しかし、1日をかけての見学には日帰りバスツアー的イメージがあって講座としての意図が伝わりにくく、受講希望が少数で実施できなかった。

とはいえ、巡検は実践的な教育手法であり、大学が標榜する実学教育にも適う市民講座の形式の一つであることは言うまでもない。そこで、翌2008年になって、主タイトルの『兵庫探訪』を残したまま『かくれた心のふるさとを巡る』のサブタイトルをつけ、巡検の前週に事前研修を行う2日間の教養・歴史・文化講座として再発足させた。

すなわち、県内各地の自然・文化・暮らしからテーマを設定して担当教員が行う講義と、現地見学のほか郷土史家などからミニ講義を受ける巡検を組み合わせた講座へと変更したのである。前者は地域的特性を座学のなかで学ぶ文字通りの講座、後者はそこで学んだ事項を現地で確認する体験講座と言ってもよいであろう。この変更によって、県内にありながら地元住民などを除けばよく知られなかった地域の姿を見つめ直すという、いわば「兵庫学」とでも言う姿勢に本講座の目的があることを鮮明にしたことになる。また、旅行会社による日帰り観光との差別化については、埋もれた地域資源（観光資源）に重点をおくことで講座らしさを求めた。

かくして本講座は、2008年度の第1回こそ受講者10名余であったが、現在では巡検用バスの乗車定員（後述の理由により32名としている）から受講を断る状況にまでなっている。

2. 講座のテーマと巡検地

これまで本講座で実施してきた概要をあげておきたい。

講座は春期と秋期に分けて年間4回開催し、いずれも主タイトルは上述の通り『兵庫探訪ーかくれた心のふるさとを巡るー』である。各回のテーマと巡検地はその都度設定するが、県内を順次巡る形をとっているために、全体としては知られざる兵庫を探るという視点からの講座としてまとめられている。

講座の実施日はいずれも土曜日で、講義（1時間30分）と巡検（終日）は1週間の間をあけて行う。巡検は雨天であっても決行する。各回とも参加費は2日間で4,500円（バス代・交通傷害保険料を含む。2010年度から5,000円）であるが、巡検時の昼食代（1,000円程度）や見学費用などは原則として別途負担となっている。見学場所をまとめたレジュメその他の資料は講義時に配布しておき、事前学習のほか巡検時に持参して車内解説やミニ講義に活用するよう求めている。

テーマと巡検地、実施日、受講者数、現地の講話者（注：講話者は現地でミニ講義をしていた方、説明者は現地で解説を受けた方。以下同じ）などは次の通りである。

《2008年度春期》

(1) 知られざる宝塚 参加者12名

（講義） 5月17日 宝塚の二つの顔

（巡検） 同24日 もう一つの宝塚を探る

小浜宿の町並み・西谷地区のぼたん園とダリア園・千苧水源地・有馬富士公園ほか

講話者：地域おこし法人代表、地元寺院住職 特色ある食べ物：手打ちうどん

(2) 兵庫のかくれ里 参加者23名

（講義） 7月5日 宍粟の風土と暮らし

（巡検） 同12日 しそう森林王国を探る

伊和神社・木造旧波賀町庁舎・原不動滝・東山温泉・国見森公園ミニモノレールほか

講話者：元波賀町長 説明者：しそう森林王国担当者 特色ある食べ物：笹うどん

《2008年度秋期》

(1) 城下町“篠山”・“柏原”と水分れ公園 参加者20名

（講義） 11月8日 『歴史ある町』の魅力

（巡検） 同15日 篠山と柏原、そして水分れ

田松川運河・八上城下・城下町篠山・陣屋町柏原・本州最低の分水界ほか

講話者：郷土史家（地域おこし法人代表）



写真1 宝塚市小浜宿で案内板に見入る巡検参加者
(2008年5月、山住信裕提供)



写真2 旧粟津郡波賀町の木造庁舎を見学中の巡検参加者
(2008年7月、山住信裕提供)

(2) 酒米と紙のふるさと 参加者 22 名

(講義) 12月6日 とり残された町の町おこし

(巡検) 同 13日 酒米と紙の町を探る

中町コミュニティセンター・銅精錬所跡・東山古墳群・杉原紙研究所・薬樹薬草園ほか

講話者：元町議（地域おこし法人代表）

《2009年度春期》

(1) 一円電車からミズバショウへ 参加者 33 名

(講義) 4月18日 明延鉱山変遷史

(巡検) 同 25日 鉱山から観光へ

ミズバショウ公園・養蚕農家群集落・明延鉱山坑道跡・神子畑選鉱所跡ほか

説明者：養父市職員 特色ある食べ物：桑うどん

(2) 淡路の暮らし、そして震災を忘れないために 参加者 32 名

(講義) 6月13日 兵庫に包みこまれた淡路

(巡検) 同 20日 淡路の昔と今

野島断層保存館・線香工場・伊弉諾神宮・生が島(砂洲)・生石砲台跡ほか

講話者：伊弉諾神宮宮司 特色ある食べ物：蛸めし・チョボ汁・淡路牛

《2009年度秋期》

(1) 播磨灘沿いの歴史散歩 参加者 32 名

(講義) 10月31日 瀬戸内の港－高砂・室津・坂越－

(巡検) 11月7日 播磨灘の沿岸を巡る

明石人腰骨発見地・相生の松・石の宝殿・風待ち港室津・坂越の町並み・赤穂塩の国ほか

講話者：なし 特色ある食べ物：穴子めし

(2) 西播磨山間部の知られざる文化 参加者 32 名

(講義) 12月12日 中国山地とたたら鉄

(巡検) 同 19日 町並みと千種鉄の里を尋ねて

宿場町平福の町並み・河呂農村歌舞伎舞台・天兒屋たたら跡・千種高原ほか

講話者：宍粟市歴史資料館職員 特色ある食べ物：鹿肉・手延そうめん

《2010年度春期》

(1) 但馬の隠れ里を探る

(講義) 4月24日 但馬牛誕生の地の暮らし

(巡検) 5月8日 山奥にできたしゃくなげの里

香美町小代・但馬牛飼育農家・チョウザメ養殖池・全国しゃくなげ公園ほか

講話者：郷土史家 説明者：飼育・養殖者 特色ある食べ物：但馬牛・山菜

(2) 猪名川流域をさかのぼる

(講義) 7月3日 多田荘と多田銀山

(巡検) 同10日 流域の知られざる歴史を巡る

田能の弥生遺跡・有岡城址・多田神社・多田銀山跡・木食仏ほか

講話者：資料館学芸員、多田神社宮司、郷土史研究会会長

≪2010年度秋期≫(予定)

(1) 市川流域の昔と今

(講義) 10月30日 生野街道と銀の馬車道

(巡検) 11月6日 市川流域の史跡を訪ねて

福本陣屋町・辻川の町並み・柳田國男記念館・銀の馬車道跡ほか

予定講話者：郷土史家

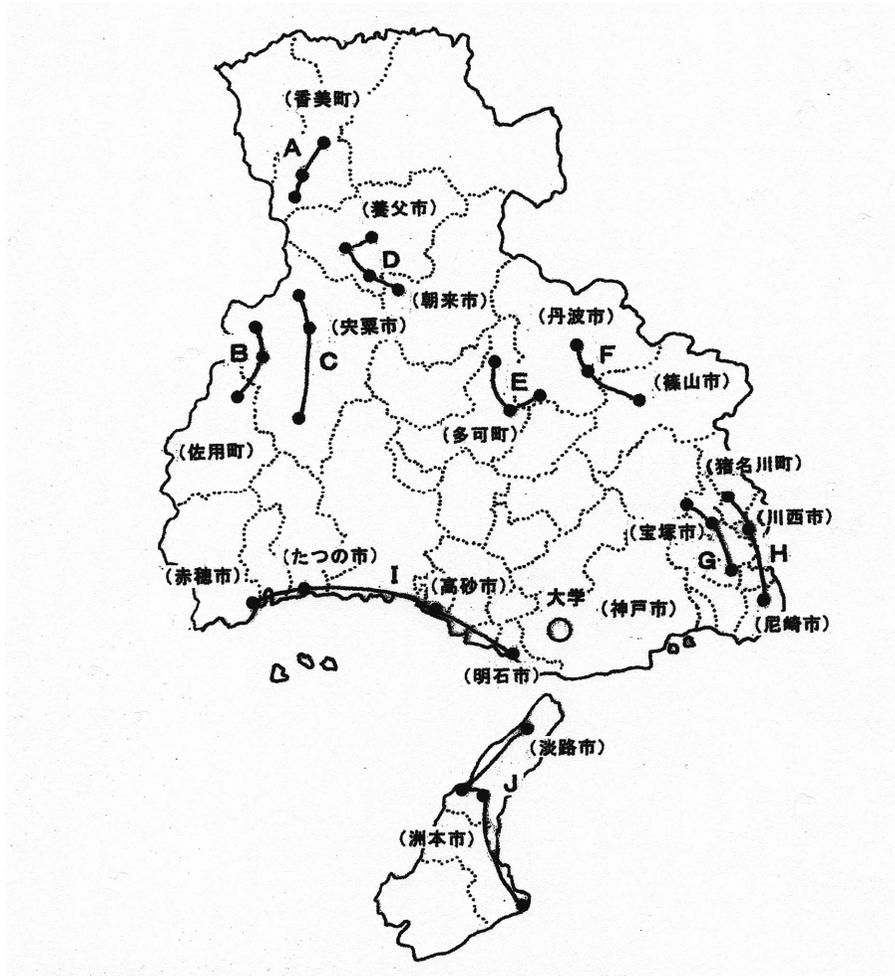
(2) 南淡路と沼島の風土

(講義) 12月4日 南淡地方の産業と暮らし

(巡検) 同11日 離れ島“沼島”を訪れる

淡路瓦工場・淡路人形浄瑠璃館・土生・沼島散策ほか

予定説明者：ボランティアガイド



地図 2008年春期～2010年春期の主要巡検地と主な見学事項（●：主要見学地の位置）

- A：2010年春（1）旧美方町小代・旧村岡町長坂（全国のしゃくなげ・但馬大仏）
- B：2009年秋（2）佐用町平福・旧千種町千草・天児屋（宿場町・農村舞台・たたら跡）
- C：2008年春（2）旧波賀町原・東山・国見の森（木造庁舎・播磨一宮・CSR公園）
- D：2009年春（1）大屋高原・明延鉦山・神子畑（水芭蕉・養蚕農家・坑道跡・精鉦所跡）
- E：2008年秋（2）旧中町中村・旧加美町杉原（酒米栽培・余暇公園・紙研究所）
- F：2008年秋（1）篠山市八上と河原町・旧氷上町石生（運河・城下町・分水界）
- G：2008年春（1）宝塚市小浜と西谷・千苺池（宿場町・近郊農業・水源地）
- H：2010年春（2）尼崎市田能・川西市多田・猪名川町銀山（弥生遺跡・多田院・銀山跡）
- I：2009年秋（1）明石海岸・高砂・室津・坂越（海食崖・相生の松・石の宝殿・潮待ち港）
- J：2009年春（1）野島断層・旧一宮町多賀・成ヶ島（震災記念館・伊弉諾神宮・砲台跡）

Ⅲ. 特徴と課題

1. 巡検型講座の特徴

a. 独立した講座としての講義

巡検に先立って行う講義は、見学事項に関する事前研修の意味をもつにとどまらず、地域に根ざした歴史と地理、ときには地域経済などから焦点を絞って行われる。先にあげた一覧の講義テーマからもわかるように、例えば2008年度秋期(2)「とり残された町の町おこし」では地域活性化のあり方を考え、2009年度秋期(1)「瀬戸内の港—高砂・室津・坂越—」では集落の歴史地理を講じるなど、それぞれが独立した歴史・文化講座となっている。

これらはいわば巡検地をフィールドにした担当教員の研究成果の公開であるが、次週に出かける地域に関係する事項を深化させた内容であるだけに、受講者の関心と呼ぶことになる。

b. 現地の研究者によるミニ講義

巡検時には、現地の研究者等から地域の歴史や産業などに関する講話をうかがうことにしている。この場合、前週の講義に関連した内容となるよう依頼するが、特にテーマを設定することはない。これまでに講話をして頂いたのは郷土史家、地域活動家、宮司、住職、行政関係者など地域事情に精通した方々で、いわゆる観光ガイドは含んでいない。その場所は地区公民館、郷土資料館、役場庁舎、神社社務所などさまざまであるが、ときには1時間を越える講話もあってミニ講義ともなっている。

このことは、担当者による現地での解説に加えて巡検の意義を高めることにつながり、日帰りの小旅行が見学の枠組みを越えて市民講座のなかに組み入れられる要素の1つなる。なお、謝礼は目下のところ少額にとどまるが、これが今後の課題になるかもしれない。

c. 知られざる地域への注目

巡検地に選ばれるのは、都市住民(受講者の大半は神戸市民)にとって身近にありながら訪れることの少ない兵庫県内の諸地域である。このような地域の暮らしや自然・文化・産物などは、受講者にはこの機がなければふれることのない新鮮なものと映る。受講者からは「近くまで来たことがあるがここは知らなかった」(例:篠山市河原町)、「この隠れた文化財は知らなかった」(例:洲本市生石砲台跡)、「名前は知っているが来たことがなかった」(例:高砂市石の宝殿)などの声もある。珍しい観光地を知らせることは講座の主目的ではないが、結果として観光地研究や地域史(誌)研究の成果による社会貢献の1つになるといえよう。

d. 受け入れ地の地域振興への寄与

都市住民がこれまで知らなかった地域に目を向けることは、その受け入れ地にとっては知名度の上昇による観光客開拓に結びつく。観光振興による活性化を望む地域の側からは、期せずして宣伝の機会になるといってもよい。物品に関しても、巡検時の買物などによる直接的効果がわずかながらみられるほか(地場産品の購入で品切れになる事例もあった)、昼食には郷土名物を一品

提供するよう求めるとか（例：淡路のちょぼ汁）、地域の伝統工芸を体験する（例：多可町の紙漉き）などを通して地域振興に寄与することになる。

巡検によって都市住民が訪れることは、さまざまな情報が伝えられる機会となって、都市・村落間交流における村落側のメリットも少なくないのである。ここでも巡検型の講座が社会的に貢献したといえるのではないか。

e. 兵庫学への取り組み

講座のタイトルからもわかるように、各回の講義・巡検で対象とする地域は兵庫県内に限定している。これには日帰りのバス巡検に力点をおくという物理的条件も関係するが、開かれた大学の姿勢の1つとして地域に根ざした研究・教育活動があることと無関係ではない。流通科学大学が地域に向けるまなざしは、大学名がイメージさせる流通、経済などにとどまるのではなく、その基層部分には地域に密着した人々の暮らし、さらには歴史・文化が存在するとの建学理念に基づくものである。

したがって、講座で県内各地を巡るとともに地域の生活・文化に関する諸問題を取り上げることに、大学の立ち位置とも結びついた地域との関わりの姿勢が示される。このことは、講座が県内一巡の方向性を持つなかで、大学としての兵庫学の確立を志向することを表している。

f. 日帰りツアーとの差別化

あとで述べるように、受講者のなかには巡検を日帰り観光の一種とらえて参加する人々も存在する。たしかに、本講座では、巡検の持つ観光的な楽しみの要素により受講者の増加を期待する側面がないとはいえない。しかし、受講者の意見の集約からは、上にあげたb現地研究者の話、c知らない地域への興味、e県内について学ぶといった特徴により小旅行の意義が増幅され、学習的欲求をも満たす巡検との判断からの参加者がはるかに多い。

業者等が実施するツアーでは、著名な観光地・施設などを季節に合わせて巡り、食事にも力点をおいて企画される。それらが人々の観光への願望からみて重要な意味を持っていることは言うまでもないが、そこでは隠された観光資源や食べ物を含む日常の暮らしを探る機会は多くない。社会教育的意図を持って行われる文化協会などの見学会も、対象が歴史的施設や文化財に偏る傾向があって、総体としての地域を見つめる視点がやや弱いのではないか。兵庫学としての志向性や現地に出かける前の講義などだけではなく、巡検そのものの日帰りツアーとの差別化は本講座の特徴の1つである。

g. 教養講座の活性化

現在では、新聞社をはじめ民間組織により多様なカルチャースクールが開かれ、行政機関も住民向けの市民講座を頻繁に開催している。一方、大学が主催する市民向けの公開講座、なかでも教養的内容の講座はテーマや講師による受講者の増減が大きく、全体としては必ずしも多数の受講者を集めているとはいえない。

もとより大学が開催する市民講座は研究成果の社会還元の一環であるから、受講者数の多少とは無縁のものであろう。しかし、経費等を勘案すれば相当数の受講者が必要なことは言うまでもなく、一般市民のニーズと無関係ではありえない。とすれば、日帰り観光の要素もある巡検を加えることによって、ニーズの掘り起こしになる可能性が出てくる。このことは、大学の教養型市民講座全体の活性化にも関わってくるものと考えられる。

2. 巡検型講座の課題

a. 講義と巡検の連続性

事前に行う講義と現地への巡検の一体化は本講座の最大の特徴である。しかし、受講者の側からみれば関心を喚起させる一方で興味の分散にもなりかねず、講義の内容と見学する事項の連続性への留意が必要となる。現在は講義の最後に巡検地紹介を加えることで補っているが、不十分かもしれない。ことに現地で行われる講話（ミニ講義）との連続性は、講話者が部外者であるだけに担当教員による補足説明を要する場合もある。

b. バス利用に関わる問題

実施面で大きな問題なのは、バスを利用した巡検のため受講者数が限られることである。現在は大学の中型バスを使用しているが、補助椅子を用いないので定員は32名が限度となる。その結果、定員を超えた申し込みを断らざるをえず、市民講座が担う教育的役割に対する量的な限界として大きくのしかかることになる。

バスの利用が巡検地の選定に影響を与えることもある。日帰り巡検のため移動時間の制約があって、兵庫学を志向しつつも巡検地を県内全域に広げられない場合も生じてくる。

逆に、移動時間からは可能であっても、兵庫学関連地として県外を加えることが困難となっている。これは運行地域に基づくバスの借上げ代に関わるもので、講座の本質とは別の要因がその内容に影響を与える恐れもある。

c. 事故の危険性

学外へ出かける巡検では常に事故の危険性がついてまわり、なかでもバスによる移動を行うだけに交通事故への配慮が必要となる。とはいえ、事故の心配と巡検の教育的効果との比較は容易ではない。現状では団体交通傷害保険に加入して対応しているが、これで十分なのかどうかは常に課題として残される。もっとも、これまでに発生した事故は怪我が1件（食堂扉のガラス破損による）にとどまっている。

d. 受講者の問題

一般募集された受講者の多くは中高齢者で、男女比はほぼ半ばしているがどちらかといえば男性が目立つように思われる。夫婦やグループのほか1人参加も少なくなく、また回を重ねるにつれ継続して受講する者が増えている。これらからは、地域の知られざる歴史・文化に関心を抱く

人々のための講座という特徴が理解されつつあることがわかる。

もっとも、受講者のなかには講座のうち巡検が有している楽しみの部分、すなわち日帰り観光的部分に関心があって、旅行社等によるバスツアーの変形ととらえる者もないではない。したがって、今後は巡検先により受講者数に変動が生じたり、事前の講義の必要性を問う意見が出てくる懸念もある。

e. 担当教員の負担

講座の担当教員は、テーマに沿った講義を前週に行うほか、次週の巡検では車中や現地での解説も担当する。巡検に関しては、当日が1日中拘束されるだけでなく、実施に先立って行わねばならないことから多いため負担が大きい。見学個所の選択と事前交渉、現地での講話者や説明者の選定と依頼といった講座に関わる準備だけでなく、バスの通行可能ルートの確認、昼食の場所とメニューの交渉、事前に配布するパンフレット類の収集などのような雑務もある。

これらは、巡検型講座である限り不可欠な負担ではあるが、講座を継続させるためにはどこまで軽減できるのが検討課題となる。

f. 収支に関わる問題

独立採算で講座を維持しているのではなく、また経費等の公表は困難なため、収支の詳細を明らかにすることはできない。しかし、仮に講座1回（講義と巡検）当たり受講料4,500円、受講者30人として収入総額135,000円、これからバスの借上げ料や通行料、傷害保険、謝金、下見諸経費などを除けば残額はそれほど多くないことがわかる。市民講座が大学経営の一環におかれていることは言うまでもないが、それは受講料収入によってではなく、社会への学術的貢献としての位置づけによるのである。したがって、その採算面が問われるようになると、講座そのものの存続が危ぶまれてくる。

IV. 地域学と観光学の結合としての巡検型市民講座 —結びにかえて—

流通科学大学における巡検型の市民講座は、現在のところ市民の賛同を得て定着しつつある。受講者のなかからは、次回の訪問地への問い合わせだけでなく、兵庫地域研究に向けた研究会組織への発展を期待するとの意見もでている。その背景には、巡検の場所として既成の観光地ではない場所を選定し、市民に埋もれた地域資源を認知させるとともに地域のあり様を考える契機としたことが関係しよう。

もちろん巡検という方法は、大学が提供するすべての市民講座に当てはまるものではない。しかし、歴史や文化、あるいは地理的なテーマの講座のなかには、講義に加えて現地に身を置いてみるといった行動、いわば小旅行的な要素を付加することが生涯教育としての効果を大きくする講座も存在すると言ってよい。ここに、地域を見つめる諸科学の講座が観光学の扱う研究対象と結びつくことになる。

観光学が市民向け講座に提供できる研究成果は多岐に及ぶが、重要となるのは観光ニーズの多様化のなかでの体験観光のあり方や観光地に関する適確な情報など、観光旅行に関わる内容であろう。しかしそこでは、観光業者等の情報との差別化とか、既成の観光地ではない地域の魅力を伝えるには講義のみで十分かという問題がある。したがって、巡検により現地に出かける講座は、体験観光の一つの実践講座となるだけでなく、自然的・歴史的な地域資源を発掘して観光振興の一翼を担うことにも結びつく。しかも、観光が地域という面的広がりを持ち、暮らしの舞台ともなっている場所において行われる行為であることを知る機会ともなる。

言うまでもなく巡検は日帰り観光、あるいは俗に言う小旅行ではない。とはいえ、巡検は現地に出かけるという形に表れた類似性が市民の関心を引き起こし、地域学にもつながるまなざしを持って足元の地域を考える市民講座の主要な方法の一つになるといってよい。同時にそれは、地域に開かれた大学としての社会貢献の一形態でもあると考える。

本稿は、第99回日本観光学会研究大会（神戸夙川学院大学、2009年10月10日）に於ける発表に加筆したものである。多くの助言と意見をいただいた会員各位、各種資料をご提供頂いた関係機関に深く感謝申し上げます。なお、ここにあげた巡検に関わる事務全般は流通科学大学オープンカレッジ山住信裕氏が担当し、同氏から写真提供を受けたことを付記する。